

平家物語雑考

田 中 克 己

一、朱异か周伊か

「遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の禄山、是等は皆舊王先皇の政にもしたがはず、たのしみをきはめ、諫をおもひいれず、天下の、みだれむ事をさとらずして、民間の愁る所をしらざりしかば、(一)久からずして亡じし者ども也」(祇園精舎)

平家物語巻頭の一節であるが、ここに見える梁の周伊を、朱异とすべきかと考へたのは、平家物語考證(二)の著者野宮定基卿にはじまる。周伊なる名が梁書その他の中国史籍に見えないからである。

しかし山田博士は、周伊をそのままに存し、「朱异の誤なるべし」と頭註せられた。(四)

これに対し近ごろ刊行せられた富倉徳次郎氏校註の日本古典全書本では、本文を朱异と改め、頭註には

底本「周異」と誤る。いま改める云々
とある。

この二つの態度のいづれが正しいか。

周知のごとく、平家物語の刊本は、山田博士によれば、三十四種十八類といひ、高橋貞一氏は、現存本として、八十種の名をあげてゐる。(七)これらすべてに当ることは、もとより私には不可能であるが、山田博士の底本とされた高野辰之博士蔵本はもとより、高橋氏が最良のテキストとされた舊林泉文庫蔵古寫本でも、この箇所は周伊となつてゐて、物ぐさの私の知るところでは、平家物語の諸本はみな周伊、ただ松井簡治博士蔵古寫本源平盛衰記と蓬左文庫蔵源平盛衰記とが、わづかに朱异としてゐるにすぎない。

しからば、この二書をもととして朱异とすべきでないと同じく、本文を朱异とあらためるのも武断にすぎるのではないか。

朱昇とはいかなる人物か。

その傳記は梁書卷三に見えてゐて、「吳郡錢唐の人で、十余歳のとき、好んで群聚賭博し、すこぶる郷黨のわづらふところとなつた。長じてのち師に従ひ、あまねく五經を修め、礼記易經に明るくなつた。二十一歳にして任官し、ついで梁の武帝に召見され、孝経周易を講義して甚だ悦ばれ、次第に官が陞つた。魏の臣の侯景が降を乞ふと、武帝はこれをゆるすや否やを諸臣に問うた。朱は帝の心中を忖度し、声に応じて答へ、降を納れんことをすすめた。時に太清元年(西紀五四七年)だつたが、翌年、侯景は叛して、朱昇を伐つをもつて名とし、城内にせまつた。人みな朱をとがめた。朱はそこで慙ぢ憤り、病を発して死んだ。朱はもともと権要に在ること十余年、よく君主の意をうかがひ、能を曲げて阿諛し、寵任せられたのだ」といふ。いかにも感心できない人物ではあるが、

趙高、王莽、安祿山に比すべき大姦とは考へられない。(八)

平家物語の作者たちには、朱昇を大悪人と思はせる異史でも傳はつてゐたのであらうか。ともあれ琵琶法師たちは周伊と詠じてゐたに相違ない。そして聴き手たちは、くはしくは知らぬながら、安祿山たちに比すべき唐土の大悪人の名を、あたらしく知つたとの満足感で受けとつてゐたことと思はれる。山田博士の校註の態度の方が私には正しいと感ぜられるが、いかがであらうか。

二、年月日

平家物語が文学書であつて、史書ではない證據に、そのしるす年月日が史実とは方々でちがつてゐる。氣のついただけをあげてみよう。

事	項	平家物語	史	料
(1)	得長壽院造進供養	天承元年 三月十三日	(百鍊抄・中右記)	天承二年
(2)	清盛の出家	仁安三年十一月十一日	(愚管抄・公卿補任)	二月十一日
(3)	二條上皇崩御	永萬元年 七月廿七日	(百鍊抄・皇代記・愚管抄)	廿八日
(4)	清水寺炎上	同 廿九日	(百鍊抄・歴代皇紀・一代要記)	八月九日
(5)	高倉天皇の親王宣旨	同 十二月廿四日	(百鍊抄・歴代皇紀・皇年代略記)	廿五日
(6)	同 立太子	仁安元年 十月八日	(百鍊抄・玉葉・愚管抄)	十日
(7)	後白河上皇御出家	嘉應元年 七月十六日	(玉葉・百鍊抄)	六月十七日

(8)	殿下に乘逢ひ	嘉應二年十月十六日	(玉葉・百鍊抄)	七月三日
(9)	松殿基房 太政大臣兼宣旨	同 十一月九日	(玉葉)	十二月九日
(10)	高倉天皇御元服	同 三年正月五日	(玉葉・百鍊抄・愚管抄)	三日
(11)	神輿 入洛	保安四年四月	(百鍊抄・一代要記)	七月十八日
(12)	同	保延四年七月	(百鍊抄・一代要記)	四月廿九日
(13)	覺快法親王の天台座主任	安元三年五月十一日	(玉葉)	七日
(14)	明雲の罪科の公卿僉議	同 十八日	(玉葉)	廿日
(15)	中宮御着帯	治承二年六月一日	(山槐記)	廿八日
(16)	旋 風	同 三年五月十二日	(明月記・百鍊抄・山槐記)	四年四月廿九日
(17)	松殿基房等流罪決定	同 十一月十六日	(玉葉)	十五日
(18)	頼政三井寺に入る	同 四年五月十六日	(玉葉・山槐記・百鍊抄・愚管抄)	廿二日
(19)	三井寺炎上	同 廿七日	(百鍊抄)	十二月十一日
(20)	維盛 福原を出発	同 九月十八日	(山槐記・玉葉)	廿二日
(21)	同 入洛	同 十九日	(同)	廿三日
(22)	同 東國へ出発	同 廿日	(同)	廿九日
(23)	富士川合戦	同 十月廿四日	(吾妻鏡)	廿日
(24)	還 都	同 十二月二日	(百鍊抄・玉葉・山槐記)	十一月廿六日
(25)	維盛 近江源氏追討に出発	同 廿三日	(玉葉・山槐記・百鍊抄)	二日
(26)	南都の僧綱の解職	同 五年正月五日	(百鍊抄)	四日
(27)	城資永 越後守に任	同 二月一日	(玉葉・百鍊抄)	養和元年八月十五日
(28)	石川義基の首渡し	同 十一日	(玉葉・百鍊抄・吾妻鏡)	九日

(29)	院の殿上の公卿僉議	同	治承五年 二月廿三日	(百鍊抄)	閏二月六日
(30)	五條大納言邦綱逝去	同	閏二月六日	(玉葉)	廿三日
(31)	後白河法皇法住寺殿へ御幸	同	廿二日	(玉葉・百鍊抄)	廿五日
(32)	南都の僧綱復職	同	三月一日	(玉葉)	廿日
(33)	大佛殿事始	同	三日	(百鍊抄)	六月廿六日
(34)	墨股合戦	同	十七日	(玉葉・百鍊抄・一代要記・吾妻鏡)	十日
(35)	城資永の頓死	同	六月十六日	(吾妻鏡)	養和元年九月三日
(36)	松殿基房歸洛	養和元年	同	(山槐記)	治承四年十二月十六日
(37)	神宮へ鎧甲を寄進	同	九月一日	(玉葉)	十四日
(38)	建礼門院の院號を受けらる	同	十二月廿四日	(玉葉)	十一月廿五日
(39)	法皇 日吉社に御幸	同 二年	四月十五日	(百鍊抄)	十四日
(40)	壽永と改元	同	五月廿四日	(玉葉・百鍊抄・吾妻鏡)	廿七日
(41)	横田河原の合戦	壽永元年	九月九日	(玉葉)	養和元年七月十日
(42)	宗盛 大納言に還任	同	十六日	(玉葉)	四日
(43)	同 内大臣の拜賀	同	十月十七日	(玉葉)	十三日
(44)	朝覲 行幸	同 二年	正月六日	(玉葉・百鍊抄・山槐記)	二月廿一日
(45)	宗盛 従一位に任	同	二月廿一日	(公卿補任)	一月廿一日
(46)	同 内大臣辭任	同	日	(公卿補任)	廿七日
(47)	大神宮へ行幸の仰出	同	六月一日	(百鍊抄)	十一日
(48)	法皇の還御	同	七月廿八日	(玉葉・百鍊抄)	廿七日
(49)	平家一門 停官	同	八月十六日	(玉葉)	九日

(50)	頼朝 征夷大將軍の院宣を蒙る	壽永二年 十月十四日	(吾妻鏡)	建久三年七月廿五日
(51)	三條中納言朝方等停官	同 十一月廿三日	(玉葉)	廿九日
(52)	歳末の除目	同 十二月十三日	(玉葉)	十日
(53)	木曾義仲の首渡し	同 三年正月廿四日	(吾妻鏡・百鍊抄)	廿六日
(54)	元暦と改元	同 四月一日	(玉葉・吾妻鏡・百鍊抄)	十六日
(55)	頼朝 正四位下に敘せらる	同 日	(玉葉)	三月廿八日
(56)	平頼盛 關東へ下向	元暦元年 五月四日	(玉葉)	同 壽永二年十月十八日
(57)	同 上洛	同 六月九日	(百鍊抄)	廿日
(58)	同 三河守に任	同 八月六日	(吾妻鏡)	五日
(59)	同 西國へ発向	同 九月十二日	(吾妻鏡)	六月五日
(60)	義經 五位尉に任	同 九月廿七日	(吾妻鏡・山槐記)	八月八日
(61)	範頼 都を立つ	同 二年 二月三日	(吾妻鏡)	八月六日
(62)	頼朝 從二位に敘せらる	同 四月廿八日	(吾妻鏡)	元年九月一日
(63)	宗盛父子 鎌倉に着く	同 五月廿三日	(百鍊抄)	同 二日
(64)	義經 腰越状を廣元に呈す	同 六月五日	(百鍊抄)	廿七日
(65)	時忠等 流罪	同 九月廿三日	(吾妻鏡)	十六日
(66)	義經 奏聞	同 十一月二日	(吾妻鏡・玉葉)	五月廿四日
(67)	北條時政 上洛	同 七月七日	(玉葉)	元暦二年五月廿日
(68)	義經追討の院宣	同 八月八日	(玉葉)	十月十三日

簡単にわかるものだけをあげてみたが、このたぐひはまだあらう。それにしても、平家物語の年代記でないことはいふ

までもないが、このいはば出たらめの年月日はどうしたことだらう。源平盛衰記はこの点だいふ趣を異にしてゐる。すな

はち前掲六十八項の中、史実と合つてゐるが、(1) (3) (4) (5) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (14) (15) (17) (20) (21) (24) (26) (28) (29) (30) (31) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (42) (43) (44) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) 三十三項で、ほとんど半ばが正しくなつてゐることになる。

また平家物語と同じで、したがつて史実と異なるのは(2) (13) (18) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) 六項となつてゐる。

源平盛衰記は平家物語の異本と考へてよろしいが、兩者の成立の前後については諸説がある。しかしこの日附の点からも結論が出るのではなからうか。平家物語の誤つた日附の半ばが、源平盛衰記では正しくなつてゐるといふのは、看過すべき事実ではないと考へられるからである。

三、李勣司馬

「彼紫宸殿の皇居には、賢聖の障子を立てられたり。伊尹、第五倫、虞世南、太公望、角里先生、李勣、司馬、手長、足長、馬形の障子、鬼の間、李將軍が姿を、さながら寫せる障子もあり。」(二代后)

管見では諸刊本みな、李勣と司馬との間に讀点を打つてゐるが、これは李勣司馬とつづけてよむべきで、さうしてこそ角里先生と對になるのだと思ふ。

李勣は唐の太宗の武臣の中で、李靖とならぶ大功臣である。その傳は舊唐書、唐書ともに載せるが、舊唐書によれば

高宗の總章二年(西紀六六九年)薨じて、太尉揚州大都督を贈られたとある。この太尉は司徒・司空とならぶ三公の官で、周官の司馬に當るわけであるから、李勣司馬と日本風につづけてよんでもよろしからうと思ふ。

なほ賢聖の障子のことは、古今著聞集に見えてゐて、宇多天皇の時に、はじめて画かれ、唐土の古今の名臣、馬周、房玄齡、杜如晦、魏徵、諸葛亮、遽伯玉、張良、第五倫、管仲、劉禹、子産、蕭何、伊尹、傅説、太公望、仲山甫、李勣、虞世南、杜預、張華、羊祜、揚雄、陳寔、班固、桓榮、鄭玄、蘇武、倪寬、董仲舒、文翁、賈誼、叔孫通の三十二人の像が列んだといふ。商山の四皓の一人たる角里先生はこの中には入らない。また李將軍は漢の李廣で、その石に矢をあてた図も別にあつたと見える。

四、殿下乗合

「入道相国小松殿にも仰られもあはせず、片田舎の侍どものこはらかにて、入道殿の仰より外は、又恐ろしき事なしと思ふものども、難波妹尾を始として、都合六十餘人召し寄せ、『來二十一日、主上御元服の御定めのため殿下御出あるべかんなり。いづくにても待かけ奉り、前驅御隨身共が響きて、資盛が恥雪げ。』とぞのたまひける。」(殿下乗合)

殿下とは時の摂政藤原基房で、清盛の命令は実行されて殿下は資盛の報復を受け、これが平家横暴の代表的な一例とな

る。

しかしこれが清盛の所為ではなく、重盛の行為であつたことには明證がある。早くそれを知つたのは、前掲の野宮定基であるが、実はそれよりも、もつと前に気づいたものがある。源平盛衰記のこの條には、「秘本に云く、入道相国は福原にて逆修行はれける間なり。平大納言重盛の所為なりと聞えきと、普通に大きにかはれり。」との但し書がある。この註がいつごろ誰によつて書かれたのかは、私にはわからないが、すでに慶長古活字本にあつたのであるから、野宮定基よりは、たしかに早いことになる。

清盛を頑迷固陋な老人、重盛を温厚誠実な人物として、対照的に描き出さうとした平家物語の意途を、史料として裏切るのは、基房の弟九條兼實の玉葉、同じく弟なる慈鎮の愚管抄ともに重盛の所為としてゐることである。平家物語の愛讀者のため、愚管抄のその一節をとよんで見よう。

「小松内府重盛治承三年八月一日ウセニケリ。コノ小松内府ハイミジク心ウルハシクシテ。父入道ガ謀反心アルトミテトク死ナバヤナド云ト聞ヘシニ、イカニシタリケルニカ。父入道ガ教ニハアラデ。不可思議ノ事ヲ、ツシタリ。子ニテ資盛トテ有シヨバ。基家中納言ムコニシテアリシ。サテ持明院ノ三位中将トゾ申シ。ソレガムゲニ若カリシトキ松殿ノ攝籙臣ニテ御出アリケルニ。忍ビタルアリキヨシテアシクイキアヒテ。ウタレテ車ノ簾キラレナドシタル事ノ有シヨ。深クネタク思テ。関白嘉應二年十月廿一日高倉院御元服ノ定ニ參内

スル道ニテ、武士等ヲマウケテ前駟ノ本鳥ヲ切テシ也。コレニヨリテ御元服定ノビニキ。サル不思議有シカド世ニ沙汰モナシ云々。」(傍点田中)

五、八月の雪

「八月十二日の午刻許、白山の神輿、既に比叡山東坂本につかせ給ふと云程こそありけれ。北国の方より雷おびただしく鳴て、都をさして鳴りのぼる。白雪くだりて地を埋み、山上洛中おしなべて、常葉の山の梢まで皆白妙になりにけり。」(鵜川軍)

八月は陰曆であるから、今の九月十月の交であらう。それにしても雷とともに京都盆地一面の降雪とは大天変である。京中の人々が白山の末寺鵜川を、西光の子の加賀守師高が焼拂つたことに対する、天の怒のあらはれとして、おそれおのいた有様は——平家物語にはしるさないが——ありありと想像され、のちの西光の惨死も、理由はあつたが、このときの天の咎めと考へられるやうに思はれる。しかしこの天変が平家物語の作者の文学的虚構であつたことはもとよりである。

前にのべた九條兼實の日記玉葉のこの前後をしらべても、八月の降雪など見られない。源平盛衰記はこれに気がついたのであらう、白山の神輿は、安元三年正月晦日に出發、二月十七日敦賀に着き、三月十四日の子の刻に比叡山の客人の宮の拜殿に入つた。海津から琵琶湖を舟で渡つたのだが、この

とき

「雷電ひびきて水の雨ふり、能美の山の峯つづき、塩津、海洋、伊吹の山、比良の裾野、和爾、片田、比叡山、唐崎、志賀、三井寺に至るまで、皆白平に雪を降る。」

とする。京都盆地の雪でなく、近江盆地の雪で、時も陰曆三月なのである。これなら京都にゐた九條兼實の目にふれなかつたわけであるし、陽曆四月の降雪、あるひはあつたことかもしれない。しかしこの訂正は平家物語の虚構にくらべて文学的に格段の見劣りがするではないか。

六、水火の責

「治承元年五月五日、天台座主明雲大僧正、公請を停止せらるゝ上、藏人を御使にて如意輪の御本尊を召返せ、御持僧を改易せらる。……明雲は法皇の御気色悪かりければ、印鑑をかへし奉て、座主を辭し申さる。同十一日鳥羽院七の宮、覺快法親王、天台座主にならせ給ふ。これは青蓮院の大僧正行玄の御弟子也。同じき十二日先座主所職を停めらるるうへ、檢非違使二人を附て、井に蓋をし、火に水をかけ、水火のせめに及ぶ。」(座主流)

この「井に蓋をし」以下が私には永い間わからなかつた。源平盛衰記もこの箇所は一層簡単に「檢非違使二人を差遣はされて、水火の責に及びけり」と記すのみである。

内海弘藏氏「平家物語評釋」では、頭註に「水火の責といふのは、井を閉ぢ、火を消してしまつて、その鬩汲を絶つて

苦める意であらうと、考證にいうてゐる。」とあつて、野宮定基の解釋を引いてゐるのであるが、たぶんこれが正しからう。実は「井を閉ぢ」は玉葉にちやんとするされてゐて、

「……今日天台座主法務僧正明雲、宜シク見任ヲ解却シ職掌ヲ停止スベキノ由、宣旨ヲ下サル……座主ハ去夕ヨリ使廳ノ使ヲ付ケ云々家門ハ繩ヲモツテコレヲ結び、房家一切人ナク、井ニハ蓋ヲ覆ヒ、下部等堂上ニ昇リ立チ、大略同座スト云々、コレ大衆ノ張本ヲ召サルニ依ツテナリ云々」(原漢文)とある。井戸に蓋をしたことは明記し、「房家一切人なく」が僕婢すべてを放逐して炊事もできなくなつたことをあかしてゐるのである。

七、橋合戦

「六波羅には、『すはや宮こそ南都へ落させ給ふなれ。追懸て討奉れ。』とて、大將軍には左兵衛督知盛、頭中将重衡、左馬頭行盛、薩摩守忠教、侍大將には、上總守忠清、其子上總太郎判官忠綱、飛驒守景家、其子飛驒太郎判官景高、高橋判官長綱、河内判官秀国、武藏三郎左衛門尉有国、越中次郎兵衛盛繼、上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清を先として、都合其勢二萬八千餘騎、木幡山打越て、宇治橋の詰にぞ押寄せたる。」(橋合戦)

この平家の軍勢二萬八千餘騎に対し、源三位入道頼政の味方は、三井寺から平等院へ来る途中で

「其勢一千人とぞ聞えし」(大衆揃)

とある。この三十分一に近い軍隊も、渡辺黨などの武士、三井寺の悪僧を加へた一千人であるから、その奮戦は目ざましいものがあつたらう。橋合戦の一章がまうけられた所以である。

かう思つてゐた私に、例の玉葉の治承四年五月廿六日の條はかう教へる。

「……午ノ刻、檢非違使季貞、前ノ大将ノ使トナリテ院ニ參ル。時忠卿相逢フ。申シテ云フ、『頼政ノ黨類併セテ誅殺シ了リ、彼ノ入道、兼綱ナラビニ郎従十余人ノ首ヲ切り了ンヌ。宮(以仁王)ニオイテハタシカニハソノ首ヲ見ズトイヘドモ、同ジク伐り得了ハンス』ト。ソノ次第ハ、寅ノ刻バカリ、逃者ノ告ヲ得テ、スナハチ檢非違使景高飛驒守景、家嫡男、同ジク忠綱上總守忠等已下、士卒三百餘騎逐ヒテコレヲ責ム。時ニ敵軍等宇治ノ平等院ニオイテ食ヲ羞フノ間ナリ。ヨリテ宇治川ノ橋ヲ引ク。忠清已下ノ十七騎、マヅ打チ入ル。河水アヘテ深クナク、ツヒニ渡ルヲ得。シバラク合戦ノ間、官軍進ムヲ得ズ。ソノ隙ヲ得テ引イテ降去ス。官軍ナホモコレヲ追ヒ、〔綺〕河原ニオイテ頼政入道、兼綱等ヲ打取り了ンヌ。ソノ間カレコレ死者ハナハダ多ク、疵ヲ蒙ルノ輩、アゲテ計ルベカラズ。敵軍ワヅカニ五十餘騎、ミナ死ヲ顧ミズ、アヘテ生ヲ乞フノ色ナシ。ハナハダモツテ甲ナリト云々。ソノウチ兼綱ノ矢前ニ廻ルノ者ナシ、アタカモ八幡太郎ノ如シト云々。小時、平等院ノ執行良俊、使者ヲ奉ツテ申シテ云フ、『殿上ノ廊ノ内ニ、自殺ノ者三人相殘ル。ソノウチニ具首ナキノ

者一人アリ、疑フラクハ宮カ』ト云々。王化ナホ地ニ墮チズ、逆賊ツヒニ擒殺サレ了ンヌ。タゞニ王化ノ空ナラザルノミニアラズ、マタコレ入道相國ノ運報ナリ。恐ルベシ。未ノ刻、左大臣參入ス、シバラクシテ重衡、維盛等ノ朝臣重衡ハ甲冑ヲ着ナガラ參上、仰セニヨソツテナリ。維盛ハアラタメテ表冠ヲ着ス。御前ニ參候シ、像ヲ戰場ノ子細ヲ語り申ス。クダシノ兩人ハ先ヅ大将ノ家ニ會合ス。景高等寄セ向フノ後、ナホ大将軍一兩ヲ分チ遣ハスベキノ由議定、事ノ由ヲ奏セント欲スルノ間、コノ兩人左右ナク馳セ向フノ間、一ノ坂ノアタリニオイテ、敵軍ノ首トモヲ見テ、アヒトモニ歸リ來ルト云々。」

これで見ると二万八千餘騎の平氏の軍は実は三百餘騎で、平家物語のあげる諸將の中、實際に参加したのは景高、忠綱の二人だけである。さらにはなほだしいのは、頼政方の軍勢がわづかに五十余人といふ事実である。話半分どころのことではない。しかし物語をよく見ると、大衆汰に三井寺に集まり、六波羅を夜討しようとした頼政方は、頼政、仲綱、兼綱、仲家、仲光の親子たちをはじめ、大衆、堂衆、渡辺黨など五十二人の名があがつてゐる。このうち三井寺で暇を賜つた乗圓房阿闍梨慶秀らの老僧を除いても、頼政に附いて橋合戦に参加した勇士の名は、ほとんどすべて平家物語はとどめてゐるのである。これは稀有のことといはねばなるまい。しかし上總守忠清が大将軍の前に参つて、「泥芋洗へや向ふべく候、河内路へや参り申すべく候」とたづね、足利又太郎忠綱がまつ先に渡つたありさまなど、頼政方の筒井明秀や一來法師の

勇戦などとともに、愛誦久しかつただけに、五十人对三百人の小戦闘、事実は私さへ二等兵として参加した戦闘と異らない小戦闘と知つて、なにか失望さされるのはいかがなものであらうか。

〔註〕

(一) 以下テキストは一に山田孝雄博士校訂岩波文庫本平家物語を用ひる。

(二) 明治四〇年刊、帝國書院本による。

(三) 一六六九年生、一七一一年歿。

(四) 大正四年、東京宝文館、校定平家物語。

(五) 昭和二四年、朝日新聞社。

(六) 岩波文庫本の序文。

(七) 平家物語諸本の研究(昭和一八年、富山房刊)

(八) 源平盛衰記(有朋堂文庫本、一頁)では、この四人のほか、夏の寒泥サツをあげてゐる。寒泥は楚辭天問篇に「泥ハ純狐ヲ墜リ、妻ニ眩クワムンデコ、ニ謀ル、ナンゾ羿ケイノ射革シヤカクニシテ、交々コレヲ吞揆スル」とあり、夏帝の相を亡ぼした有窮國の王なる羿といふ弓の名人の妻をうばひ、この矢もて革をもつらぬく勇力あつた羿を滅ぼしたといはれる。寒泥のことは史記正義にも見えてゐるが、源平盛衰記の作者は、そのいづれによつたにせよ、なかなかの学者である。ただし博学を衍ふことが必ずしも文学的に成功する途であるとはいへない。

(九) 前掲書。

(一〇) 岩波文庫本二二二頁。